

氏名（本籍）	こが 古賀 くらら（奈良県）
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲第 125 号
学位授与年月日	平成 29 年 3 月 23 日
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第 36 条第 2 項及び学位規程第 3 条第 2 項の規定による
学位論文題目	近世画法書を基底とした彩色料とその調合について
論文審査委員	主 査 教授 藁 谷 実 副 査 准教授 城 市 真理子 副 査 教授 関 村 誠

## 論文内容の要旨

日本絵画は古くから近代まで、その多くは天然資源による限られた画材料のなかで多様な表現を可能にしてきた。一方で、現代は合成の絵具をはじめ多くの人工的に作り出された材料が豊富にあり、それ以前の画材料や技法、または、それらを支える産業の減退もみられる。社会状況の急激な変化により消費者の需要も変化し、伝統的材料の原料入手やその加工技術が限られた僅かな場のみでしか残っていないものが少なくない。一度途絶えてしまった技術を復活させることは大変に困難なことである。従来名称をとりながらも使用されている原料が異なったものになっているものや、長年使用されてきた材料や絵画技法のうち、今はもう失われてしまったものも多く存在する。また、画法書の研究分野においては、各派の画法書に記される画具や彩色技法についての比較は今日まで手付かずになっている領域である。

現在は、文化財の保存科学の分野については研究が進んできているものの、保存科学もまだ発展途上にある上、そもそも根本的な古典材料や用法についてのソフト面についてまだまだ把握されていない事が多い。芸術作品を科学調査の結果のみで判断するのではなく、時代や作者、制作背景などを踏まえ、描き手の立場に立った材料とその用法についての考案も疎かに出来ないはずである。またそれは、文化財の分野のみならず、今日の絵画制作にも活かされるであろう。当時の材料技法を顧みず表面的な色を合わせるだけの模倣では、材料技法の観点からみると十分に意義を果たすとは考えられない。単に色合わせを行うだけではなく、今日までの歴史的状況を踏まえつつ現代の絵画制作においての実用性を見出すことも重要であると考えらる。

本研究は近世の画法書に記される顔料及び染料をはじめとして、その材料技法についての考察と検証を行う基礎研究とする。主に十七世紀終わりから十八世紀前半、日本にお

いて日本絵画独自の絵画論が見られるようになった時期の画法書を基にし、『本朝画法大伝』を主として『本朝画史』、『御絵鑑』、『画筌』、『画法彩色法』といった画法書を主として進める。このうち、『本朝画法大伝』は土佐派唯一の指南書であり、彩色料の使用法について本格的に記されたものとしては日本の技法書を牽引するものと考えている。しかし、後の狩野派の技法書に殆どが引用されるなど影響は大きいものの、その研究は遅れをとっていると言わざるをえない。各画法書に加え、本草書や古事典といった様々な典籍を照らし合わせつつ、当時の絵具と現在での使用について相対的に論考する。

本論文の第一章ではまず、関係する典籍についての概要を記し、これまであまり表に出る事の無かった画法書においては概説とともに掲載を行う。第二章の第一節では顔料と染料について、第二節では鉱物と岩石について、第三節では日本画の彩色料の発色について、第四節では近世画法書に記される彩色料について絵具の原材料から辿る事により色材料を概観する。各画法書の記述を比較しながらこの時代における画材料の使用を相対的に把握しつつ、今日の画材料への応用を目的とする。第三章ではこの時代の混色重色といった調合色の使用について各画法書の記述、第四章では『本朝画法大伝』の著者である土佐光起による作品を取り上げ、その彩色を『本朝画法大伝』記される彩色法と共に追っていく。作品は『本朝画法大伝』が記された時期と同時代に制作された光起最晩年の作である重要文化財指定の『大寺縁起』を取り上げる。この絵巻は本絵巻三巻に加え、下絵である「大寺縁起下絵」三巻も共に現存している大変貴重なものである。彩色料とその調合色について体系的に整理するよう努め、絵具の制作や色見本の作成も行いつつ実践的な絵具の使用を検討する。また、多様化する表現と画材の中においての材料生産の今日の現状を踏まえ、日本絵画としての材料の役割を考察するとともに、原料から目的に適したより良い画材料を選択することの一助としたい。絵画を制作する者の立場から、自然科学と人文科学の架橋的研究の一端になればと考える。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、江戸時代に土佐光起の著わした画論『本朝画法大伝』に記載される彩色料について読解し、他の同時期の画論・画法書の記述と比較検討を行い、それらの画材・製法を実際に試しながら確認するという手法を用いた画材研究である。古画を科学的に調査した先行研究は既にあるが、画論・画法書をこのように読み解く研究を、日本画の熟達した実技によって再現していくという点で画期的といえる。従来の画論研究でも科学的な画材研究でも、画論・画法書の画材の項目は等閑視されがちであったからである。

本研究では、注釈付きで出版されていない画論も、本人が調査して参照し、くずし字や版本も自ら読解しており、その努力もまた非常に高く評価できる。また、画論・画法書のみならず、土佐光起筆「大寺縁起絵巻」（重要文化財）も実見し、光起の画法書の画材がどのように使用されているかも調査した。本作品には光起自身が作成した下絵が現存し、それには画材の注記も含まれているため、併せて、これも調査している。現在、大寺縁起絵巻の上・中巻は所蔵者の事情で未見となっているが、下巻のみであっても十分な研究成果を挙げている。

以上のように、本研究は、自ら天然の画材を収集し、画論・画法書も自ら資料を調査・収集・読解しており、さらには、客観性を高めるための色料見本も作成するという徹底的で並外れた努力による、極めて貴重な研究成果である。博士論文として完成度の高い非常に優れた研究論文であり、格別に高く評価しうるものである。